新板
絵入

# 略縁起三家秘録 三之巻

2.015
3

門へ 13
獅 2015
巻 3

# 獅子縁起出家形儀

## 目録

鍵利

## 第一 寄二獅子一釋教

中ごろ一枚肩板いかづちもの
南天竺のかぶき芸者の出家の
獅子帽子八袈裟の数極

第二　寄山伏賀福

[illegible]

第三　寄丸織道心

[illegible]

㊀寄柳子釈義

[illegible]

西方の女房又坊主なり業まはりものゝこそあれ男とらんすてゝやし
ぬ。ある時ひいきの芝居桟敷のかけ役者て。心肉にしく勤て見て道し大家
来り今芝居子と名をとれ。面白くし後生がらいて来てするゝ芝居へ志
ざしくの出勤。不座切の究りこと絶よ世人の噂かなべ。西方の不約合
大悪人とやまして大きな難る此件のちよ行倍ちよ封しさるが手つけ
すといふ道理。でそろく此事相の様子はなよ数をさせて識よお住
持おめ弟子法よ同餅よいきどれすひんまへの我く西方仏がさけぬと
るぐよふねのすまゐに。出られど。いつぞやうちなけまる此業の蔵人のす
よし勿体なさ未来永劫の罪障なりとこそ人まへのとあらど逃くる
ち町息の大寺に於ての彼芝のを勤めまし。唯さく女が肉合と絶
のゝめよやにいよく他宗への邪見支礼の私人へのおもをあまで
情なさは彼の手のひいい名なお世のむくいぞざで。何彼岸だなぐ迷ひ

未来世又見と書きもう爾の中へくまれあて。此竿と両親をあるの因果
果は車輪のごとしと書く。ち流轉ふてゝし無始よりさいかごこゝらよまいめ
り。輪廻はんと限らま二てし佛神よ於てハ、くく流際下死の人ぬと仰ぎ
すゐて。さふしてゆけく、又信ずる芝居ござん飯もとろく因縁するる又因果
經よ同様で傳説の所へ入るよく生ぜれた。お世つて評するなりと論じ居
書来まうるとかへ人々又見と信ぜと志信今業因かれて芝
かねととて世人よ見られど来世又人ねとて家よ見るる又前生ござの
見せて今んくてのるろひ業因とこそく深きおもふ人て善悪
つくるをうたと極めよ役者よまるの中につく仏法がはち横道の
千変万化の道すり。去れくあさき世人よあの道よ思ひをたゞく
にかよ輪廻色縁よはしる縁なる世へよもつくれ色縁とあつつにとがし一方に
励て万に流ぶとうすと志つゞ信へ暴源の如くて尾

出来そこない

## 二 高山伝右衛門福

福といつて定の名なり。福定あくまで不生不死の仙性をうけ給。
ふと鬼ひるがえ人へ併ふ家と字。不習ぬ海内しくやさ彼やう井れ古の達
義高あつて切ほうれる蒼海内しくやさ彼やう井れ古の達
八百年で大哲のうるの八百年ほど系れ代くまれに兼平の宗義落とんの
力能治あつる性行まれて神のいとなまれ初めこの福はれて
ときんけ色長定のりめ行よ世界一人用に拘成幸さ世界
極の十ふ定にうひでといつてうそ弱の仏を又人るでぬむ
ふ一社と橋のちるせを咲るせあ二人り口宮〻癖〻とんゆこを
ほどのてを言てをお椎のてんくうるでを母めに仏ぐを何
美平又ちふ八コハ日を紀身祥る素家業業一よいつ月和る月るや
らびふ仏あ長定人に八賀人るお侯よのくせらくなのくとそ親

主代のあぐらやハ又楽あそびうるさゞほの十かさをはりまぬそつき位お
なりぬまさるまんがり堀川てみてをも柳ハさくら花ハおのぶさにて目のつ
くへん識や土佐出坂本山王権現ハ異論わくにましまさ　ませぬいてむびせ
つるびなおとそいのちすりぷそつ月弥のくらく子申られにゆるげさ戸さんと兆と
おくしまよりいとまあく北条福部すり此ばしも八月まつくいづる同じ秋お
曽んでうげふ早寺参り下向ん。月んをろで後夫の山伏弥す旅出立にまいおり
する身仰よ中けやすぐく云てもく新ぬあんとなるふ彼山伏の同。恭ら夜衆ぶ
姿をなんて書いぶしがり唯とうぬめんくと云おく挑中読ふりけく
月ろかし。ふ恭てるそるま一宗寺来声と立つけつま寿るけ。祖いてござ
てりとせ[illegible]ふりまそていふ祇。恭夜ま本の貧苦ふられじて無変
山王権現は語句のさぶいと行ってるかとお遠くまず申て。そわ
梁がん山中此をうく神のごとくに云ずのせぶ。宗旨にハよく大キよ語る我代いよ

いろおるともや仕ひあんとおそておのくをとよろん。山伏平来和のるこくお
藤村かせ。えよりは急ぐ入るふ背らに一密出家の云おりて又僧又書をと
も能無かてい入先をしいるお大徳まん鏡るり天お世の有業をぬ
かざく方様あくも佛神へおまぬ我ひとうけらて後笑出る方之行いよ
我ハ比叡山の法僧が幕下夫婦すて山玉比中向すて云ちくにも畏る行え
ゐもあそも石仕合の猛けあに信せりくもをかせぐるすかふ我て云云衣
兜巾立身とたるをとるる事なく[illegible]やけりあやくるまゝく在れたよ
あをいろて無。夫婦ともにそのお法の如くあま共入分にて在[illegible]宇宙
とのまだ云とぞ[illegible]さるを世に持密として八島僧お云之。主要入会結縁
ハ夫より[illegible]せる前縁まし出家よりそ我ふ[illegible]まあるれど[illegible]の[illegible]まぶ[illegible]
ようねうるハ悪魔云智の中るいくにせん。都て世と特識結遂よ示貞
炙くさ音跳五味のきぬ第をゆるるまて後も早にて勢車あをすて福徳

とかくまぬるハ彼七福神の像そそを知らじ此摩訶縁のまとひの百花
いづれもかく別らし此数ハ何んの否ぞ。呼男も不仕合ふ名を不せん業枯ハ若葉
我ぞみとおもきそむさおろんすくいよく主を告ほど。旦達一念大師のいはく。我
法ハんを以て仏ハ文字を立ずと説しめく。小智ハ却て仏の碍となるとそ
云て無益の易占ハ迷ひのたね。一向天命に任せ現世の果をまつて色衣来
来世を知るといへど。其夜此生涯のうちたから言葉にん勇とりて来世ハ安
楽とおがふむ者くハおもじ此る中せぶおのが風邪さるぞんくとるやかの風を
部て出づハ祈まま者てんらせおそり。実ハ三味ハ夜にてさかくろめく露路を
無縁しても虚識を背子に護り其夜にハ男をうつて日本唐禅親にハ
の窓に入て眼をさらし内すも。彼山がかとし七福神の名をきりて
お大黒坊子おてハ夜るがハ市まり茶和色ててとん家でぞ出てハあ
りうん思ふハ大そそこ向して祈ごろ今すせあと信心とくるあるる総紙

あんちあまし昔りて知るさに知らぬなり。修行者の者がにハ日を経て知りぬ
延ひ無縁の名僧とおかめるまで花にきくらぶハ何事ぞあまらたりで別天住所に
まし一字を建立仕合ひも母すみ大福寺と号し我等秘密の法修てくまし
多つ事をまつり奉る一宗繁昌の法を日を追て大くなるごとき教誨を
とりおおこる人多つるとる人も別まへひめなのもて百貫とのりて石切
がりうる地をんいくるて力付の数よせるも其背にいるがくま
これおかがの庭石ちのとらちおくさるくと窟ひとり。色にさうしとの
一也こ此持つるも法ある人が背子が流ちまきて由ぞ杉の枝をとく
てはるやとあげくとら人え。弟よ多門天のつらりしめすれさらに一の分持
るる。ぶつまるされぬやうにつきのまんで後へくし汝はそくろまんの
事のみそ人宝玉くのよしく小判持なさまで百貫とせりしあるぎ法力
の仏前仏前に胃甲とるいしまくもがのるまれバ必ず来ことべし

胴巻結ひ夜着が串縁に掛けたる火の粉ほどまでいつも絡ん
ころころ身まで体身の繕ひ形と隠し鉢の品の比ちまで然みつろ待て
桂は鉾飛とちらりひ家まで月は六夜の路[illegible]和尚は
から疑ひとさけ断とたくえ何あまでおまへ丸太既取ぶ対まひまし
同蓋はハアここと云ひて出ると言ふ事は辛苦び百足の中にぶらく
まらぬ現はこ衣門の御利生でありまいり

# ㊂ 壽丸鐵道人

寿月も一る一直出合ひを逆手越にあさらぬ寿露ひ八方言葉しろ
用捨あて別世に来りしるを見るの其外極楽りとりや夜に当風を
とろかのくハ世ふ中の子合言の言ふ通すてお話が世を捨て人乃氣
性とかてかくに似ろぱよしや愛の浮世けがりれ此世去。なとふびんと
ぞいれへとまるおまて六番丸境は絶えん積み重んで天狗の枝ぶ掃ると

何ぞ今日まで今さら何まさら死出し。ご逆寿来世入ろうるより足やする道
縁子と抑く挨拶し。私まてけふもしつてよかとしけるまく功徳ひ
わて母丸かく昔語の縁をひくにして有。祖父母の縁にとらって丸入
と法名し丸こ紙ろちまて身より寿出道よ一穴と建去るとらか
丸似の本堂　御丸ねとし。ろうかなお厩唐秘す丈るる丸似りに丸
こさうへの丸桂。こひの仏は縁りを隠すに仕てやりまいお丸がん
ぶんの丸き抱道因んて縁を。ば唯作のかいろんまめ唐のもとろくき
夜に候すぱおるれらくと人[illegible]の家の御まで御とらさしそは法名
寿像は縁ら出者に法然がらうまうし死抱ハのしくおろそれも境言入
ろもと出家とつかひでに粉にてハ夜あの掛構をえろくはるるお勧
つうしろんとも之段もむ。何がる承くにつるろ人は夜文他法えてかろ
のおそるまで。ぞやし丸入ぬの。また又おろうぶしと云弟に住まい門おに市

とす。そのあの男女の影のうつるを郷ひの樹がうつると考へたるなるべし。
坊さまがうつる。男女なるお稚子さまがいらっしゃる。男女伝説
ふるい話でうしさまがうつるのは神さまの神さまの
おうつりなさるとこの一ツ松みん鎮
ちうぜんとうかたの眼のまへでおうつりなさる乳をはなさまをよかるれる五六羊や
どのさのまでるひとつにうとうとうあるいるもうよかうそう刑こびりて破
衣を和歌一ツ坊の口と花とそとうとうまのあと生でちふうちつつさ者
変の六ツの法変と云ふのをうつぶ。毎日鎌大町十町のうれ鎌倉ふ
て書るる六人ゆうくとうさ世海ふ。弥陀仏のおうげうぐれ仕
みをあるる。ぬるう行田村のをはなれ系彼九八和尚のとうふ寺世で
の大ル和尚世俗ぬのちくく鎌うまそ寺を伝りれで。京方坂
のあ内大きう和尚の法たうを和尚人ゆ四ひ九人うの

俗うるのいろは書をと花うも。こ年中嵐よちうめうさ
るのあすのよたれうちくざうん。四月晦日今出川ひ
てハ。ほとともめおるを遊ととでの四一族のうげさ那ちる我くを
嬰児の義母と考へどく。却て四月一人の飛九我ハべしさいちけ
まで。高野紹の武ちうちあうまでつとに泊てハれ。ほとびとれのを石
主廉五高必表のとうろ四郎ハうるぐうく以ど。ほあうてハまは
世俗が現世のたるをそこそ以へ。いまぐそ四ちるうめよ出家者世の
おあうあるぐ四親族ゆそおるをのまひ百倍ゆべ一法よ重人
る父のあうあ四ゆ仏とをくうぐとうや行ゑ色しと形法よ四
杉師ゆぐるうべ坊主村の名とれ九ひ休む主高よ扇とう人世
ありぐ山姥の一ツの姿とあの人影高の名やうまうんいうてぐん
ぐうあ四ゆそと四切雅のうあをまであ中れ名を祈しゆうあまう

るるはもとより。沢先きまどろみ侍るに主人も代たがへる話
よ西東じ人。おなじ古郷よりよ人我郷人のとまりに死ぬるまで
一見仏よ拝ひしるまでは那の孔子のおしへ孝義の祖まで
書及ぶとそろ人。先人教ゆる孝義がゆ家の法師もかさるべき法師
ゆゆ給ゆゆ人先又仏さ魂人の仏経撃場も勿論みけまべ仏ゆ見ぬ人は
は信神のお動と拝されてさぶ。仏法神の仏見ぐろうまる事業の所
おゆゆ神祭祭せよ。西おれは経歴と申げてさぶと双方ゆ
ゆゆ分ゆゆ分ゆ。まゆ家門ゆゆ家ゆ協立ゆ。
代繁りとゆ祭まで皆ゆ撃ゆけてゆ生ゆ人書記先ゆ大かゆゆ
先ゆ仕合とゆゆ仕儒ゆ生ゆ

こゆ出雲終